

いいでさん

飯豊山周辺森林生態系保護地域

面積	計： 11,101.69ha （置賜森林管理署）
設定目的 （管理方針書より抜粋）	飯豊連峰の中心部にあって、雄大で起伏に富んだ山岳地帯となっており、全域が磐梯朝日国立公園に含まれている。<u>標高400～2,000mの高山帯までの垂直的な森林帯を有し、亜高山落葉広葉樹林、ハイマツ林などの原生的で多様な森林が見られ、動植物相も多様性に富んでいる。</u> これらの原生的な森林生態系を保存することにより、自然環境の維持、動植物の保護、遺伝資源の保存、森林施業・管理技術の発展、学術研究等に資することを目的とする。
前回調査の評価・課題等	保護林設置目的である原生的な森林生態系が維持されている。
モニタリングの実施間隔	10年

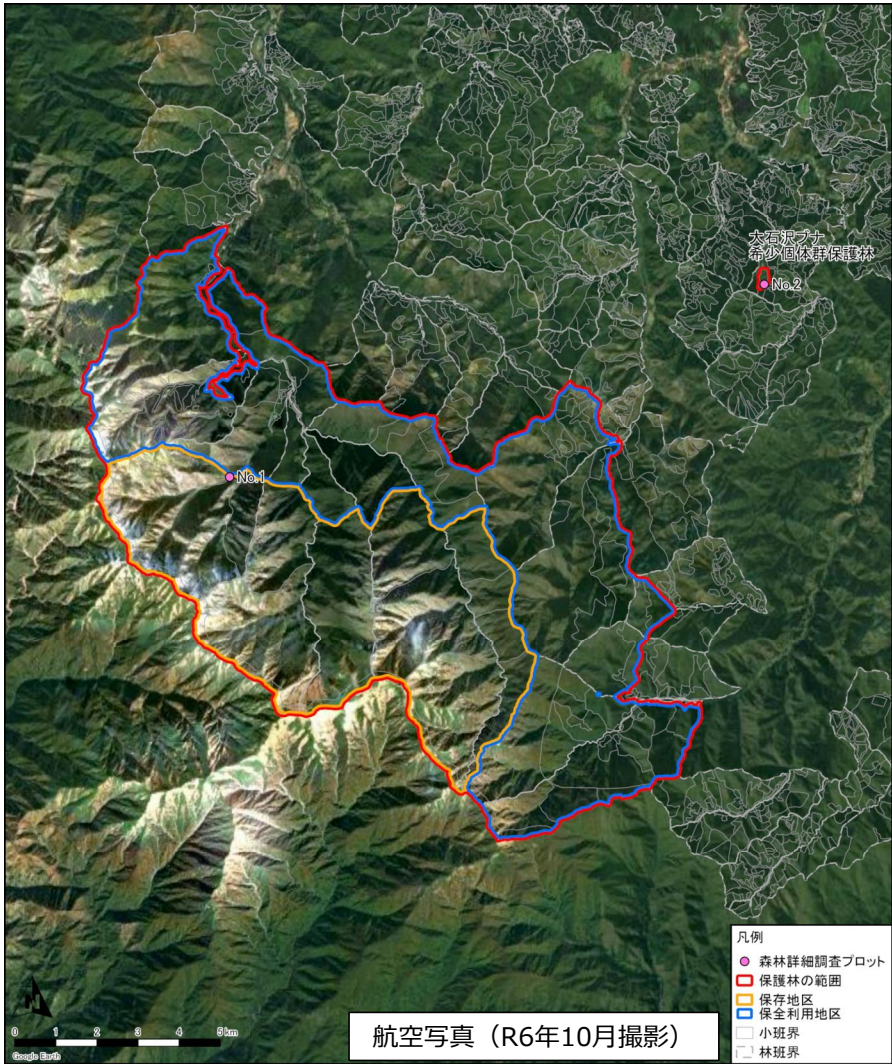
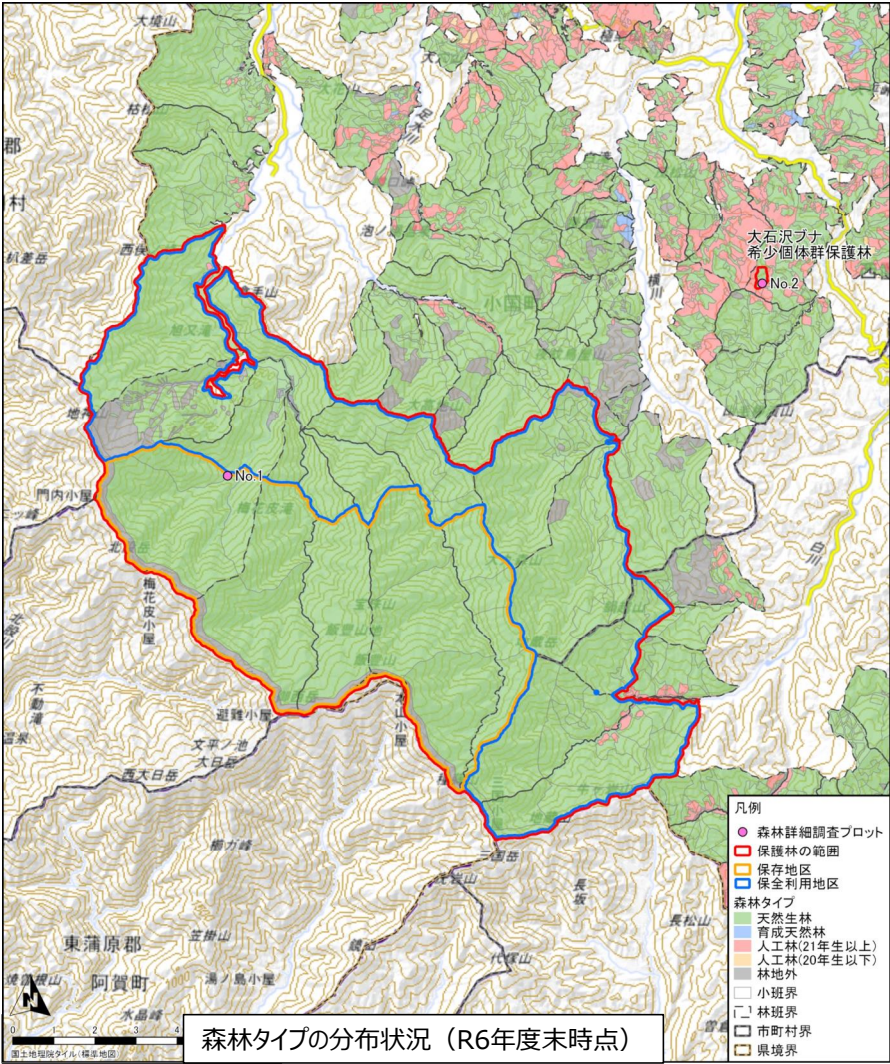
飯豊山周辺森林生態系保護地域

実施した調査 資料調査、森林概況調査、森林詳細調査(1箇所)

デザイン

飯豊連峰の中心部にあって、雄大で起伏に富んだ山岳地帯となっており、全域が磐梯朝日国立公園に含まれている。標高400～2,000mの高山帯までの垂直的な森林帯を有し、亜高山落葉広葉樹林、ハイマツ林などの原生的で多様な森林が見られる。

本保護林内及び周辺の森林タイプの分布に変化は確認されなかった。

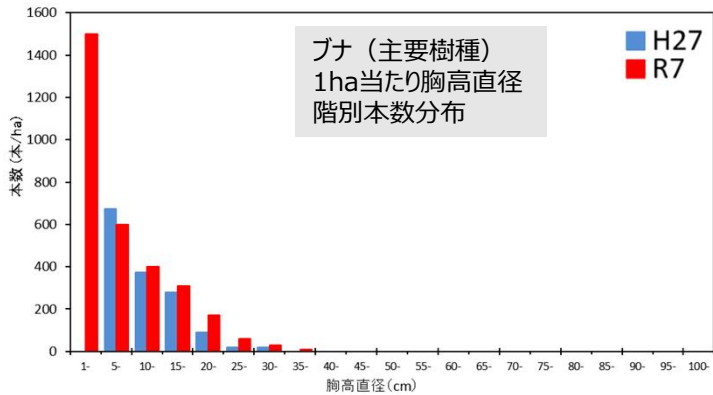
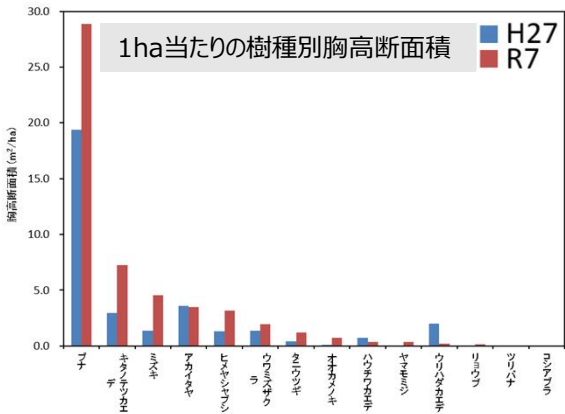


デザイン 森林概況調査、森林詳細調査
【プロットNo.1】

	H27(9月9日)	R7(9月24日)	比較結果等
磁北方向			大きな変化はない。
磁東方向			大きな変化はない。
磁南方向			大きな変化はない。
磁西方向			大きな変化はない。
天頂			大きな変化はない。

樹種	平均胸高直径(cm)		胸高断面積(m ² /ha)		胸高断面積割合	
	H27	R7	H27	R7	H27	R7
ブナ	11.9	7.8	19.37	28.86	58.2%	55.1%
キタノテツカエデ	8.0	6.4	2.97	7.25	8.9%	13.8%
ミズキ	7.2	4.0	1.39	4.55	4.2%	8.7%
アカイタヤ	12.1	7.6	3.58	3.51	10.8%	6.7%
ヒメヤシャブシ	8.3	4.3	1.31	3.17	3.9%	6.1%
ウワミズザクラ	9.0	7.6	1.39	1.97	4.2%	3.8%
タニウツギ	6.3	3.1	0.40	1.19	1.2%	2.3%
オオカメノキ	7.8	2.8	0.12	0.71	0.4%	1.4%
ハウチワカエデ	6.9	6.9	0.74	0.38	2.2%	0.7%
ヤマモミジ		7.6		0.35		0.7%
ウリハダカエデ	10.3	6.8	2.00	0.18	6.0%	0.3%
リョウブ		2.0		0.14		0.3%
ツリバナ		1.9		0.06		0.1%
コシアブラ		2.3		0.04		0.1%
14種			33.26	52.38	100.0%	100.0%

※緑セルは主要樹種を示す。

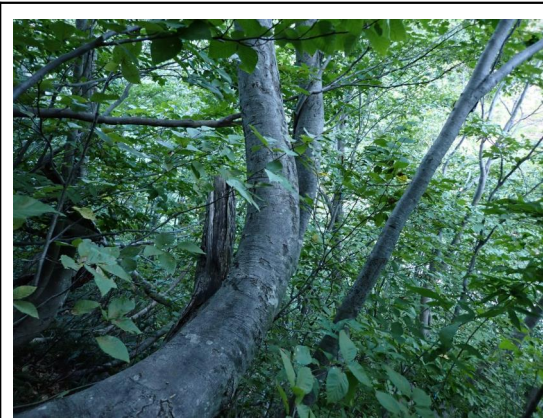
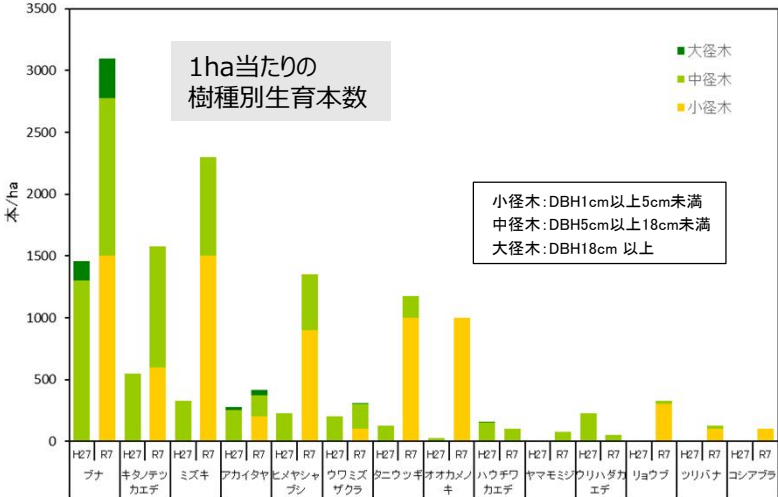


- ・主要樹種であるブナの胸高断面積は増加し、胸高直径階の進階が確認された。
- ・胸高直径階別の本数分布はL字型の分布を示し連続的な更新が行われている。
- ・胸高直径は最大でも35cm程度であり、多雪と急傾斜により成長が抑制されていることが示唆される。

デザイン 森林詳細調査 【プロットNo.1】

樹種	生育本数(本/ha)		本数割合	
	H27	R7	H27	R7
ブナ	1460	3095	40.8%	25.8%
キタノテツカエデ	550	1575	15.4%	13.1%
ミズキ	325	2300	9.1%	19.2%
アカイタヤ	280	415	7.8%	3.5%
ヒメヤシャブシ	225	1350	6.3%	11.3%
ウワミズザクラ	200	310	5.6%	2.6%
タニウツギ	125	1175	3.5%	9.8%
オオカメノキ	25	1000	0.7%	8.3%
ハウチワカエデ	160	100	4.5%	0.8%
ヤマモミジ		75		0.6%
ウリハダカエデ	225	50	6.3%	0.4%
リョウブ		325		2.7%
ツリバナ		125		1.0%
コシアブラ		100		0.8%
14種	3575	11995	100.0%	100.0%

※緑セルは主要樹種を示す。



調査地の外観（プロット1）



調査地の外観（プロット1）

デザインに関する評価

基準	指標	結果
気候帯又は森林帯を代表する原生的な天然林を主体とした森林が維持されている	原生的な天然林等の構成状況	森林タイプの分布に大きな変化は確認されなかった。 ブナが主に林冠を構成し、樹高は10m前後であり亜高木層に留まっている他、大半の樹木が斜立や根曲となるなど雪圧の影響を強く受けた林分である。主要樹種の成長が見られた。

- ・ブナの生育本数が前回調査から約2倍以上に増加した。
（調査手法の変更により1cm以上の小径木が計測対象となったため本数が大幅に増加した）
- ・小径木や1cm未満の稚樹は株立やひこばえではなく実生から成長した単木であった。

価値 森林詳細調査 下層植生調査結果

【プロットNo.1】

年度	H27	R7			
調査区	プロット全体	N区	S区		
低木層の被覆率(%)	80	30	70		
低木層の優占種	ブナ	ブナ	タニウツギ		
草本層の被覆率(%)	30	40	60		
草本層の優占種	オオカメノキ	オクノカンスゲ	リョウメンシダ		

出現種数	57	18	16	環境省RL	山形県RL
アオダマ	○		○		
アカタヤ	○				
アカカマツ	○				
アケハ	○				
イケマ	○				
イヌガンソク	○				
イネ科の一種	○				
イワガラミ	○	○			
ウド	○				
ウリハダカエデ	○	○			
ウツミダサクラ	○	○	○		
エノキザイ	○				
オオイタドリ	○		○		
オオカメノキ	○	○	○		
オオニワトコ	○		○		
オオバクロモジ	○	○			
オクノカンスゲ	○	○			
オクマワラビ	○		○		
カハヒキオコシ	○				
カヤツリグサ科の一種	○				
キタノツカエデ	○		○		
クマノササ	○				
コシアブラ	○	○			
コマユミ	○				
サカゲイノデ	○		○		
シケシダ	○				
シシガシラ	○	○			
ジュウモンジシダ	○		○		
ショウジョウバカマ	○				
セリ科の一種	○				
ゼンマイ	○				
タニウツギ	○		○		
タムシバ	○	○			
チシマザサ	○	○	○		
ツクバネソウ	○				
ツシマナナカマド	○	○			
ツノハシハミ	○				
ツリバナ	○				
ツルアリドオシ	○				
ツルマサキ	○				
ミヅコ	○				
ハイイヌガヤ	○	○			
ハイイヌツゲ	○		○		
ハウチワカエデ	○				
ハナヒリノキ	○				
ヒメモチ	○	○			
ヒメヤシヤブシ	○		○		
ブナ	○	○	○		
ホオノキ	○				
マルバマンサク	○	○			
ミズキ	○		○		
ミソシダ	○				
ミドリヒメワラビ	○		○		
ミヤマアキノキリンソウ	○				
ミヤマイラクサ	○				
ムコイラクサ	○				
ヤマイヌワラビ	○				
ヤマウルシ	○	○			
ヤマノチツ	○	○			
ヤマブキショウマ	○				
ヤマモミジ	○	○			
リョウブ	○		○		
リョウメンシダ	○				
ワラビ	○				

・下層植生の生育状況に目立った変化は見られなかった。
・ブナの稚樹や実生が多数確認された（H27、H30は豊作、R4は並作）。
・絶滅危惧種等の重要種は確認されなかった。



プロット2（N区）



ブナの実生

病虫・鳥獣・気象害の発生状況

項目	結果
病虫害	記録なし
鳥獣害	記録なし
気象害	記録なし

価値に関する評価

基準	指標	結果
森林生態系からなる自然環境の維持、野生生物の保護、遺伝資源の保護が図られている	野生生物の生育・生息状況、森林の被害状況	下層植生の生育状況に目立った変化は確認されなかった
		外来種は確認されなかった
		森林被害は確認されなかった

利活用

- ・9件の学術論文等が確認された。
 - ・飯豊連峰・朝日連峰における山岳関係者協働による登山道保全作業（菊池、2015）
 - ・飯豊山地におけるベコヒガゲErebia nipponicaの生態的知見(2)（草刈、2018）
 - ・分布拡大初期にあるシカ個体群の低コストモニタリング手法の開発（江成ほか、2020）
 - ・空中写真判読による飯豊山東部地域の全層雪崩と雪崩地形（秋山ほか、2025）

など

利活用に関する評価

基準	指標	結果
森林施業・管理技術の発展、学術の研究等に利用されている	学術研究での利用	登山道保全、高山蝶、野生動物、雪崩地形など、学術研究等への利用が9件確認された。

管理体制

- ・置賜森林管理署：森林保護員（グリーン・サポート・スタッフ）を採用し、巡視、マナー啓発等の活動をしている。
- ・山形県置賜総合支庁：巡視等は実施していない。

管理体制に関する評価

基準	指標	結果
適切な管理体制が整備されている	保護林における事業・取組実績、巡視状況等	必要な管理体制が取られている。

総括表【プロット1】

調査年度		H27	R7
調査日		2015/9/9	2025/9/24
プロット情報	斜面方位、傾斜(平均)	S50° W、38°	
	局所地形	山腹平衡斜面	
林分状況	段階	成熟	成熟
	【高木層】主要構成樹種	ブナ、キタノツツカエデ(亜高木層)	ブナ、キタノツツカエデ(亜高木層)
	【高木層】植被率	60%	60%
	【高木層】樹高	4~12m	7~12m
	【高木層】DBH	6~34cm	10~36cm
	【草本層】優占種	オオカメノキ	オクノカンスゲ、リョウメンシダ
	【草本層】植被率	30%	40~60%
林分等の状況		高木層を欠き、生育しているブナはほとんどが株立で斜上している。林冠を構成するブナは胸高直径が30cmを越えるものもあるが、積雪等により上長成長が抑えられている。	ブナが主に林冠を構成するが、雪圧により上長成長が抑制されて樹高10m前後の亜高木層に留まっている。雪圧により大半の個体が斜立や根曲を呈している。林相に大きな変化はなく、おおむね健全な状況が確認された。
林況写真			

現地調査結果総括・考察【プロット1】

・ブナを主に林冠を構成するが、雪圧により上長成長が抑制されて樹高10m前後の亜高木層に留まっている。亜高木層から低木層も、大半の個体が斜立や根曲りを呈するなど、多雪地帯の急斜面に成立する林相となっている。

・ブナの胸高断面積は前回調査よりも増加し、順調な生育が確認された。

・ブナの胸高直径階別の本数分布ではL字型の分布を示し、連続的な更新が行われていると示唆される。ただし胸高直径は最大でも35cm程度であり、多雪と急傾斜により成長が抑制されている。

・ヒメヤシャブシやタニウツギ等のなだれ地自然低木林の要素も多く見られることも、本プロットが雪圧の影響が大きい立地環境であることを示唆している。

・ブナの稚樹や実生が多く見られることから、継続的な更新が期待できる（前回調査以降にH27、H30は豊作、R4は並作）。

・森林タイプの分布状況の変化や病虫害・鳥獣害・気象害は特に確認されず、本保護林の原生的な森林生態系は全体として維持されていると考えられる。

・今後も引き続き継続的なモニタリングを実施し森林の状況に留意していくことが望ましい。

まとめ・考察

全体まとめ

- ・林相に大きな変化はなく、安定して維持されていることが確認された。
- ・課題については特段確認されなかった。

評価を踏まえた今後の対応等

項目	結果・対応等
今回の評価を踏まえた 今後の対応について	・定期的な巡視を継続 ・10年後にモニタリングを実施
保護・管理及び利用に関する事項 (保護林管理方針書)	保存地区については、原則として人手を加えずに自然の推移に委ねるものとする。保全利用地区については、木材生産を目的とする森林施業は行わないものとする。 ※現行どおりとする。